

工芸科におけるキャリア教育研究について

The Report of Career Education at Department of Craft, Kanazawa College of Art

宮永 春香 MIYANAGA Haruka (研究代表者)
 池田 晶一 IKEDA Shoichi
 林 泰史 HAYASHI Yasushi
 大高 亨 OHTAKA Tohru
 藪内 公美 YABUUCHI Kumi
 青木 千絵 AOKI Chie
 中村 有希 NAKAMURA Yuki

1. はじめに

本稿では工芸科におけるキャリア教育を考える上で、キャリア教育の実態と芸術系大学におけるキャリア教育及び支援についての動向を踏まえ、工芸教育において専門科目と連動した形でキャリア教育を行い、カリキュラムにおいて体系的に組み込むことを念頭に、課題を検討し、平成27年度特別研究において行った実践をもとに考察を行う。

度を育てる教育」²であるとしている。

さらにキャリア教育と職業教育の方向性を考える上での重要な視点として3点をあげている³。

- (1) 仕事をするものの意義や、幅広い視点から職業の範囲を考えさせる指導を行う。
- (2) 社会的・職業的自立や社会・職業への円滑な移行に必要な力を明確化する。
- (3) 生涯学習の観点に立ったキャリア形成支援の充実

2. キャリア教育について

平成23年の中央教育審議会の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)では、「キャリア教育」とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育である。」¹と定義し、キャリア教育と職業教育を分け「キャリア教育は、特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な教育活動を通して実践されるものであり、一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。」としている。そして「職業教育」とは、「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態

〈力に含まれる要素〉

「基礎的・基本的な知識・技能」

「基礎的・汎用的能力」

「論理的思考力・想像力」

「意欲・態度及び価値観」

「専門的な知識・技能」

〈基礎的・汎用能力の具体的な内容〉

「人間関係形成・社会形成能力」

「自己理解・自己管理能力」

「課題対応能力」

「キャリアプランニング能力」

これらが幼児期の教育から高等教育まで体系的に進められるものとしている。が基礎的・汎用能力の具

体的な内容については、工芸科が専門科目と連動した形で行うキャリア教育の中で必要としている内容も含まれていると考えられる。

3. 大学におけるキャリア教育の取り組み

中央教育審議会は「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)において、既に取り組んでいる高等教育機関におけるキャリア教育の取り組みを分類している⁴。

- (1) 入学初年次における後期中等教育からの円滑な接続、学びへの意欲向上のための教育的配慮
- (2) 教育課程の中に位置づけられたキャリア教育
- (3) 入学から卒業まで見通したキャリア教育
- (4) 身に着けるべき知識や能力の明確化と到達度の評価
- (5) 一人一人のキャリア形成を促進させる支援
- (6) 男女共同参画の視点を踏まえたキャリア教育
- (7) 後期中等教育と高等教育の連携

平成20年度に行われた「大学(学部)における職業意識・能力の形成を目的とした教育実施状況」調査結果から、実施大学で6割以上が授業内容として実施している内容としては「インターンシップ」や「今後の将来設計を目的とした授業」、「勤労観や職業観の育成を目的とした授業」があげられる⁵。

○実施状況		(学部数)			
	国立	公立	私立	計	
	313 (88.2%)	130 (81.3%)	1354 (89.3%)	1797 (88.4%)	
○具体的な取組内容		(学部数)			
	国立	公立	私立	計	
インターンシップを取り入れた授業科目の開設	216 (60.8%)	65 (40.6%)	883 (58.2%)	1164 (57.3%)	
今後の将来の設計を目的とした授業科目や特別講義等の開設	233 (65.6%)	75 (46.9%)	977 (64.4%)	1285 (63.2%)	
資格取得・就職対策等を目的とした授業科目や特別講義等の開設	108 (30.4%)	63 (39.4%)	810 (53.4%)	981 (48.3%)	
勤労観・職業観の育成を目的とした授業科目や特別講義等の開設	222 (62.5%)	90 (50.0%)	1019 (67.2%)	1321 (65.0%)	
コミュニケーション能力、課題発見・解決能力、論理的思考力等の能力の育成を目的とした授業科目の開設	137 (38.6%)	57 (35.6%)	718 (47.3%)	912 (44.9%)	
社会や経済の仕組み、労働者としての権利・義務等の知識の獲得・修得を目的とした授業科目の開設	89 (25.1%)	19 (11.9%)	473 (31.2%)	581 (28.6%)	
企業関係者、OB、OGなどの講演等の実施	74 (20.8%)	49 (30.8%)	506 (33.4%)	629 (31.0%)	

図1 大学(学部)における職業意識・能力の形成を目的とした教育実施状況

中教審のキャリア教育・職業教育特別部会(第4回)で寺田盛紀氏のプレゼンテーション資料「キャ

リア教育・職業教育のあり方について」が文部科学省のサイトに掲載されている⁶。そこで「2. 大学におけるキャリア教育について」の節の今後の課題として「インターンシップであれ、キャリア科目であれ、移行期や初年次のキャリア支援・動機づけの取り組み(たいていは全学共通科目・教養科目)を超えて、専門学部・大学院研究科におけるキャリア学習・キャリア科目を起し、専門課程における講義と実習的なキャリア学習(キャリアへの気づき、探索、仕事世界の洞察、専門の応用の視点を組み込むような科目・体験の取り組み)をどう展開していくか」である。

本学工芸科では講義よりも演習が中心の授業カリキュラムではあるが、専門教育におけるキャリア教育、キャリア支援を検討していく上でも重要な視点であると考えられる。

4. 芸術系大学のキャリア教育・支援の現状

平成27年に京都市立芸術大学において開催された五芸祭関連企画「芸術大学におけるキャリア支援を学ぶ会」議事録において、京都精華大学の山田創平教授は以下の発言をしている。

「キャリア教育、キャリアという考え方はともすると就職活動とセットで考えられがちだが、就職活動というのは一つの結果である。」⁷

「大学ではキャリア教育支援を考えるときに選択肢が世の中にはたくさんあることを知り、世の中に出ていき、自分で人生を切り拓いていくエネルギーを養う場に大学がなるべきではないか」⁸

上記企画と同時開催の平成27年に京都市立芸術大学において開催された「五芸術大学キャリア支援担当者 情報・意見交換会」の議事録において五芸術大学のそれぞれの取り組みがわかる⁹。京都市立芸術大学におけるキャリア支援の在り方として、キャリアデザインセンターを設置し、就職支援に加えて、

芸術家になるためのキャリア支援を行う体制を整えている。具体的には、美術アドバイザー（平日常駐）、音楽アドバイザー（予約制）、キャリアアップセンター瓦版の発行、卒業生による講演会の開催や卒業生インタビューのWEB公開等を行っており、WEBサイトにおいてイベント開催やニュース等も発信している。

愛知県立芸術大学、沖縄県立芸術大学においては基本的には就職支援中心の対策を行っている。東京芸術大学においては今後キャリア支援に関する講座を開催予定。意見交換会での発言にはないようだが、東京芸術大学のWEBサイトから、Webポートフォリオシステムが導入されていることがわかる。

私立の芸術大学における取り組みも含めて、芸術系大学において行われているキャリア教育・支援としては、段階的なキャリア教育科目の開講、卒業生の紹介等での職業観の育成、プロジェクトによる実践的かつ専門性と連動するキャリア教育、就職支援、作家・企業等支援などの進路別でのキャリア支援が中心で、そのすべてを行っている大学は少なく、大学によって取り組みや位置づけは異なっている。

5. 近年の工芸科卒業生・修了生の進路

工芸科の近年の卒業生・修了生の進路についての統計と進路の傾向について調査をもとに考えてみたい。

平成23年度から平成27年度の5年間の工芸科の卒業生・修了生の進路について、進学、就職、作家活動、その他に分類しその割合を統計したところ、学部生においては進学が最も多く52%、次に就職が37%、作家が5%、その他が6%という結果となった。修士課程の修了生については進学が19%、就職が50%、作家が30%となり博士課程修了生については、就職が60%、作家が40%という結果となった。

学部生のその他6%については、主に進学、作家を希望せず、積極的には就職活動もしていない場合が多い。就職希望者についてはほぼ全員が卒業前後に、内定を得ているケースが多い。また、学部卒業5年間の就職者の内、1年から5年以内に離職・転

職しているのは8%である。

修士課程の修了生はその他に分類される人はおらず進学、就職、作家いずれかの道を歩んでいる。進学者の内訳は博士課程、海外の大学、技術研究所などがある。

修士修了生5年間の就職者の内、1年から5年以内に離職・転職しているのは6%である。

博士課程修了者の就職は大学、高校の教員であり、同時に作家を続けるケースが多い。

卒業生、修了生問わず、作家という進路に進む人の受け皿として、卯辰山工芸工房の存在が大きい。その他にも、金澤町家職人工房、月浦工房あるいは貸し設備のある工房として、支援工房九谷やおしがはら工房、まちなか共同工房等があり、金沢を拠点として作家活動するには、大変恵まれた環境であるといえる。

主な就職先としては、陶磁器製造、ジュエリー製造、高岡銅器製造、仏具神具製造、缶製造、織物製造、アパレル、服地製造、家具製造等の製造業が多く、次いで大学、高校、中学、養護学校等の教員となっている。

進学者の主な進学先は本学の修士課程、博士課程、国内外の他大学の修士課程、高等技術専門学校（例えば家具製造技術等、学んだ専門分野以外の専門技術を学ぶ目的が多い）等がある。

以上の本学工芸科の行ってきたキャリア発達に関連する科目とキャリアカリキュラムの体系化の必要性を近年の学生の進路の現状から、検討されたキャリア教育の課題と平成27年度本学特別研究における実践としての取り組みについて次節で述べる。

平成27年度の特別研究で行ったのはキャリア教育において補完すべき内容でも検討するべきであり、

6. これまでの工芸科の取り組みとキャリア教育の課題と実践

工芸科がこれまで行ってきたキャリア発達に関連する授業内容には以下がある。

- ・ポートフォリオ作成
- ・若手工芸家の講義（年間4回程度）
- ・モノづくりと社会の現状についての講義（金谷勉先生（セメントプロデュース代表）
- ・インターンシップ（地域工芸演習Ⅰ）
- ・地域伝統産業企業との連携授業
- ・現代工芸論（工芸科教員による作家活動についての講義）
- ・伝統文化論（茶道、華道、能楽等の芸道や食文化など金沢における伝統文化を学ぶ）
- ・複合素材演習（専修するコースの素材と他の素材を組み合わせる研究を行う）

以上の内容の授業はキャリア発達においてはそれぞれ重要な意味を有している。しかしこれらを体系的にカリキュラムに組み込み、キャリア発達、キャリアデザインという観点において組み込まれていることを学生が理解し、段階的に学生が意識をもってそれぞれの内容に取り組むことが重要であり、それはこれまでの取り組みをさらに有効化する意味がある。

またキャリア教育カリキュラムの体系化のためには現状の授業内容における、キャリア教育観点からの補完すべき内容の検討も必要である。

工芸教育において、技術教育は中核にあり、素材を知り、技術を習得し、自身の表現として作品とするまでには、時間を必要とすることは間違いない。学部卒業する時点でようやく自身の作品といえるものができることも少なくない。事実作家となるのは修士課程、博士課程修了者である。修士修了者であっても卯辰山工芸工房等で技術的支援や制作指導を受けてようやく作家として社会に出ている。工芸科修士課程修了者は毎年約10名の内、毎年3名程度が作家となっているという結果である。工芸教育を行う美術大学としては、今後さらに工芸作家となる卒業生や修了生を輩出していきたいと考えている。学部時点で将来ビジョンや職業観も定まってない状況で就職活動を行う学生が多いのは、専門教育において技術や素材の習熟に時間を要すことや社会状況からの要因も関係して、学生は目前に迫るものを対

処することに追われているといった印象がある。また、自らの学んでいることと社会との接点が見出しにくいという状況も加わり、就職を選ぶ学生が多いことも否めない。このような状況において、工芸科のキャリア教育研究として以下の重点目標を掲げ、キャリア教育カリキュラムにおける補完内容の実践に取り組んだ。

・夢や目標の明確化

学生の現状思考にみられる過去の延長や成り行きで実現できることは限られており、夢や目標を持ち、キャリアビジョンを描いて自己実現する姿が求められていることを示す必要性がある。

・職業観の育成

「ビジョンアプローチ」「時空間の拡大」等の人生を俯瞰しながら生きる生き方を示す上で、夢やビジョンと職業をつなげるための職業観の育成が必要となる。

・自ら考え学ぶ力の育成

自分で課題を見つけ自ら学び考えて解決することができる力（生きる力）、それに加え発展的に思考を展開させる論理的思考能力を育成する必要がある。工芸科の授業における制作展開や素材、技術研究はこの力を養う上で重要である。

・社会との接点によるコミュニケーション能力の育成

自己との対話（イントラパーソナル・コミュニケーション）と他者（外部環境も含む）との対話（インターパーソナル・コミュニケーション）で構成されるコミュニケーション能力双方を養うことが必要。

H27年度に行った具体的な実践内容は以下の内容である。

- ・学部3年生を対象とした現代工芸論において修士

1年生による制作研究紹介

- ・プロフィールシートの作成、発表
- ・卒業生によるトーク&ディスカッションの開催
- ・トーク&ディスカッションを受けてのアンケート
- ・学生による卒業生へのインタビュー
- ・インタビュアーによるレポート
- ・卒業生の活躍を紹介するサイトの開設

「卒業生修了生によるトーク&ディスカッションの開催と参加学生によるレポート」、「活躍する工芸科卒業生修了生に対して学生による卒業生インタビューの実践とインタビュアーによる報告」、「卒業生の活躍を紹介するサイト開設」について、以下に詳細を述べる。

「卒業生によるトーク&ディスカッションの開催と参加学生によるレポート」

これまで工芸企画演習の授業では、身近なところで活動されている作家や企業人などを招聘し、学生に卒業後のビジョンを想像させ、将来への選択肢を広げられるような講義を開催してきた。今回、特別研究の一環として、本学の工芸科を卒業した先輩方に焦点を絞り、卒業後5年目の先輩と卒業後15年目の先輩に講義を分けて、それぞれ陶磁、漆・木工、金工、染織の卒業生に、卒業後について具体的な経験談を含めたレクチャーと各先輩同士のディスカッションを行って頂いた。講義を聴講した学生は、進路を考える時期でもある工芸科3年生全員には必修とし、その他の学年にも自由聴講を促したところ、40名から50名程度の学生が聴講した。

〈卒業後5年目の先輩〉

テーマ：「これまでの活動について」

「夢・5年後のビジョン」

開催日時：H27年11月13日(金)

14時～17時

講師：上田 剛（有限会社モメンタムファクトリー
・Orii 社員 鋳金卒）

神谷麻穂（作家（陶磁）・金沢美術工芸大学

実習助手 陶磁卒)

西村有希（四季株式会社 技術部小道具担当
漆・木工卒）

水野太介（葛利毛織工業株式会社 製造・企画
染織卒）

〈卒業後15年目の先輩〉

テーマ：「これまでの活動について」

「夢・10年後のビジョン」

開催日時：H27年12月18日(金)

14時～17時

講師：垣見雪世（株ドヴァ 織物企画製造会社 営業
・企画・生産 染織卒）

田 聡美（ガラス作家 鋳金卒）

戸田柳平（宥澁草柳造窯 代表取締役 陶磁卒）

村瀬貴浩（武内プレス工業 技術開発本部 製品開発部係長 鋳金卒）

村田佳彦（漆作家 漆・木工卒）

学生には聴講後レポートを提出させた。以下に学生の意見を抜粋し、学生が感じたことと、本研究のポイントをまとめていく。

「自分が大学院に進学するのか、就職するのかといったことに、徐々に関心を持たなくてはならない時期に差し掛かり、卒業生の話を聞くにはいいタイミングだったと感じられた。」「夢を抱いたままの5年後と現実を生きる15年後と、自分はどのように変化していくのか。ちょうど自分が抱えている問題点や悩ましいポイントをえぐられて向き合わざるを得ないようになるととても良い機会だと思った。」「講演を聞いて、確実に自分の中に新しい視点が生まれ、奮起させてくれるものであったと同時に、一方で、逆に冷静に今の自分を省みることの出来る機会であった。」「美大を卒業して将来どのように生きるのかを考える時間になった授業だった。」という意見が多く、この企画を行うタイミングとして3年生後期という時期が適していたと感じる。

「卒業後の制作環境が安定してくる、または就職先の仕事が軌道に乗ってくる5年後、結婚や転職な

どの大きなライフイベントを1度や2度必ず起きて乗り越える15年後の先輩方の話は、自分自身が美術を志してから、具体的に社会に貢献する方法のモデルとして美大を卒業した後の自分の将来のイメージの参考となるものであった。「もの作りをすること、何らかの創作活動をすること、それが美大卒の理想的な在り方なのかと自問する。未だに答えは出ない問題である。」「先輩の話聞くことは、明確な答えを指し示すものではなかったが、自分の将来のイメージを掻き立てるものだった。」「5年後は冒険、探求の時期、15年後は維持、大きな変化ではなく発展というように感じた。」「自分の在り方を卒業後の5年、15年と経つ中で大学で学んだ経験をそれぞれの方法で活かし、自分を表現していると感じた。かつて同じように大学で学び、卒業していった先輩たちの言葉は、今の自分の考えとリンクする部分も多く、より自分の中に具体性を持って入ってくるものであった。大学で学ぶことは、自分を深め、自分を表現することを学ぶことであり、それはものを作ったりすることだけでなく、自分自身の社会の中の在り方を想像することであると考えた。」「今回の授業をきっかけに、5年後15年後の自分はどのようになっていきたいのか具体的に考えた。」それぞれの学生が、5年後15年後どうなっているのか、想像できない未来に対して少しでも考えてみようというきっかけにはなったのではないかと感じる意見が多く見られたことには、この企画の意義があったと感じる。

「工芸科に在籍していた先輩が、歳を重ねていくうちに、どういう環境に身を置くことになったのかという、非常に身近でリアルな例を本人から聞いたことが有意義だった。それぞれの歩んできた道があり、その多様性を比較しながら聞いたことが面白くもあった。同じ会社に就職された男性と女性の先輩の話では、性差や就職した時代の差によって異なってきた事情の対比が興味深かった。」「企業で働く上で、絡み合う感情の数は大学で独りで制作するのはまるで違うということを実感を持って話されていたことが印象的だった。」「皆がそろって、行動的で色々な経験を持って信念がある人たちだと感じた。」

「歳を重ねるにつれ肝が据わってくるのもあるだろうが、それ以上に自分が今までしてきたことに自信を持っているという印象を受けた。」「準備が大切だということも聞いた一方、スランプに陥った時にどうするのかという対処法の一つとして、なるようになる、どうにかなると考えている先輩は多かった。それは頭で考え続けるより行動に移すことで解決法が見えたりするという単純なようで大事な考え方だった。」「先輩方に会って話を聞き、表情や雰囲気を見て、自分も数年後にこんな風になれたらいいなと感じたという意見も多く見られた。少なからず人間関係の難しさや転職に至った経緯、苦勞した話など赤裸々に語っていただき、具体的な話が聞けたことから、それを乗り越え今ここにいる先輩たちの姿が学生にとって何か感じさせるものがあったのではないかと思う。

「それぞれの先輩方は共通して同じことを語っていた。一つは、未来のビジョンを明確に設定すること、もう一つは人のつながりを大切にすることである。」「職業も立場も様々であったが、皆口を揃えて人との出会いを大切にすること、そして自分の内を見つめ直し、自身の軸となるものを見つける事が必要だと語った。そして自己表現で終わるのではなく、世間で何が必要とされているのかを知り、自分をブランディングし、それを外に発信することも更なる飛躍の為には大事であると思知らされた。」「工芸という分野から見られるものというのが、会社や社会に出た時の自分たちの強みなのではないだろうかということで、機械化した仕事であっても、一度手で触っているから分かる知識や経験から出来ることはすごく大きいと感じた。」「自分自身の武器を知り、磨くことの大切さと自分の興味のあるものをしっかりと掘り下げていくことが心に残った。」「工芸科で学んだこと、自分には何ができるのかというブランディング、そして自分の興味のあることを掘り下げていくことがいつか何かに結び付ける材料になるという先輩の言葉に勇気をもらえた。」「大学で自ら見つけた課題や研究に集中して取り組んだことが直接的にも間接的にも今の仕事に何らかの形で繋がって

いるように思われ、私も今できることをまずしっかり取り組もうと改めて大学での研究・制作の大切さに気付いた。」「今という時間をもっと貴重なものとして、大きな時間軸の上に立ち返って、今自分は何をすべきなのかと問いかけながら制作をする必要があると感じた。」「工芸を学んでどう生きていくのか、何をして生きているのか、未来の自分が通るであろう道を進んできた素材も生活スタイルもバラバラな先輩方の話を聞いて、同じ工芸科を卒業しても様々な選択肢が残されていることに気が付くことができ、少なからず安心した。今やっていることを必ずしもそのまま仕事にしなくてもよいし、自分の中で新しく興味のあるものが見つかったらどんどん追求していくことが大切なのだと教わった気がする。」「紆余曲折しながらも、たくさんの道があると感じた。」「先輩方を見ていて思うのは、好きであれば続けられるということが確かだと感じたことだ。」人とのつながりや将来のビジョンを明確にすることの大切さを学んだと共に、今できることに目を向けることの大切さにも改めて気が付かされたという意見も見られた。また、将来に対して様々な生き方、道があるのだということに目を向けられたことに対して、窮屈だった考え方に安心感を得られた学生もいたことは有意義だったと感じる。講義が終わった後の会話から、悩みが解決する一つの要素になったという意見や、今まで気にしていなかった職種に興味を持ったという声が聞かれた。

9名の講師は作家であったり企業人であったり、転職していたり、結婚出産などのライフイベントと仕事について語ってくれたりと様々な視点で話をしてくださった。将来の自分を具体的に思い描いていなかった学生や、ある程度しっかりとした目標を持っていた学生など、聴講した学生もさまざまであっただろうが、講師として招聘した卒業生の進路も多岐にわたるものであったことが、学生にとってより視野を広げ社会を身近に感じとることができる企画だったと考えられる。大学の中だけでは聞けないような、思いもよらない先輩の一言によって、そ

れぞれの考えに光が当たったように感じ励まされた学生も多かったのではないだろうか。また目的意識とビジョンアプローチのきっかけとなったと考えられる。

「活躍する工芸科卒業生修了生に対して学生による卒業生インタビューの実践とインタビューによる報告」

各コース1名の学生がインタビューしたい卒業生にアポ取りからインタビュー、報告及び卒業生活躍サイトにデータアップロードする作業までを行った。以下はインタビューによる報告である。

陶磁コース 修士1年 学生A

卒業生B：作家（平成18年 工芸科陶磁コース卒業）

卒業生Bさんは、言葉を選んで慎重に喋る方だった。ゆっくりと確かめつつ話すのは、インタビューという手前少し緊張していたからかもしれない。翌日、ボイスレコーダーに撮った内容を活字に起こすと、すんなりとまとめることができ、驚いた。

卒業生Bさんの作品を初めて見たのは、卯辰山工芸工房の修了展のときだった。器や現代陶芸と呼ばれるような造形的な作品が並ぶ中、コンセプトが土台となる現代美術の表現として作られた作品に心惹かれた。

アトリエを見学すると八畳ほどの和室に板をひいて改造した小さな作業場だった。机が1つ、押入れが差し棚になり、道具が収納されている。水の入ったバケツがいくつかとテスト用の小さな電気窯が1つあるシンプルな作業場だ。机の上の彫りかけの作品には、削るための小さなカンナや竹べらが並ぶ。テスト用の窯しか置かないのは何故ですかと聞くと、大きな窯を買ってしまうとなんだか陶芸しなくなりすぎてしまうそうだから、と言っていたのを覚えている。美術を始めた動機や好きなジャンルを伺うと、陶芸というよりファインアートが根本にあることがわかるが、陶芸家というより美術家という言葉が近いような、作業場を見た時にそういった姿勢

が感じられた。

インタビューの中で、印象的だったのは卒業や留学といった節目節目に、ここで成果を出せなかったらやめようと思いを抱えつつ、コツコツと制作を続けていったというくだりだ。就職した時もあったが、台所を改造し、何とか制作環境を確保して続けていく過程は、つい先日卒業したばかりの私にとって、まさに聞きたい話で、とても大きなヒントになったように思う。

インタビューを通して、興味深かったのは自分の作品を客観的に話していることだ。作品が他人からどう見られているか、どういう立ち位置にいるか、それを把握し言葉にすることは作家として必要なことだ。このインタビューを通して、作品との距離の取り方や言葉の重要性を強く感じた。

金工コース 学部4年 学生C

卒業生D：金工工芸作家

(平成18年修士課程 金工コース修了)

・インタビューした卒業生を選んだ理由

卒業生Dさんにインタビューをお願いした大きな理由はひとつ。それは今もなお、金沢で活動を続けられていらっしゃるから。大学卒業後も金沢に活動拠点を置き、切磋琢磨されている姿は、私の進路を見極めていくにあたり大きく参考になるだろうと捉えたからだ。

また、私を知る限りの大先輩の中でも特に、勝手ながら彼女へ親近感を抱いていたことは否めない。この機会にじっくりとお話を伺いたいと感じたのが事の始まりのように思う。結果として彼女の幼少時代にまで話題は遡り、自身に照らし合わせながらお話を伺う、充実した時間を過ごすことが出来た。

・インタビュー後の心境の変化

アーティストになるということは、とても無謀な話しではないのではなからうか。そう思わせてくれたのが、大きな心境の変化である。以前までは、制作は続けたいが不安定な生活に耐えられるのだろうかと考えていた。しかし、彼女の『案外と何とかな

る』という言葉に勇気付けられた。もちろん不安が消えたわけではないが、どちらかと言えば、作家として生きていく可能性を夢見て、冒険したいという思いが強くなった。

彼女のこれから挑戦したいことのひとつに、一人のモデルケースとして自身の活動を提示し、作家として生きて行く道もあることを、これからを担う世代に伝承することが挙げられる。今回のインタビューはその活動の一環とも言えるし、成る程、私はそのマジックに掛かってしまったようだ。私にとっても、丁度良い時期に彼女と対談を取り持つことができ、嬉しい限りである。

・自分の将来について

言うまでもなく、作家、一人のアーティストに成りたいと考えている。今の夢(目標)は、新しい作品を毎年手がけて一連のコレクションとし、作品と共に世界各国を渡り歩きながら、現地の言葉で発表することである。メインとなるアトリエを日本に構えるか、世界各地を転々としながら、現地の作家とコラボレーションしていくのも面白いかもしれない。先ずはその軸ともなる、オリジナリティをより深めるために、日本の大学院へ進みたいと考えている。同時に、自身の故郷でもある日本を良く知ることにも努めていきたい。

染織コース 修士1年 学生E

卒業生F：ジュエリー製造会社社員

(平成25年 染織コース卒業)

大学院への進学を控えた春休みに、卒業された先輩にインタビューへいく機会を大学からいただいた。そこで、工芸科の染織コースの卒業生Fさんにお話を伺いに行くことにした。卒業生Fさんは染織コースを卒業後、本学大学院のファッションコースへ進学し、平成25年に修了されたあとジュエリーの会社に就職された。私は自身が大学院へ進学を控えていたこともあり、どの様に大学院で勉強をされたのか、そこからどうやって修了後の生活を考えていかれたのか等を伺いたいと思った。また私が在籍し

ている染織コースでは企業への就職を希望する学生が多いが、学部で染織を学び、大学院でファッションを勉強され、“服が大好きだ”と仰っていた卒業生Fさんが、なぜジュエリーの企業に就職されたのか、参考になる話も聞けるのではないかと思いますワクワクし、インタビューにでかけた。私のまわりでも就職を希望する学生が自身の希望する業界に入るかどうかが悩み、自分が専攻していたものとは違うジャンルに就職する学生の姿も見ていた。自分が学んできたことと就職先で制作する製品との最終的な形態や素材が異なることは珍しいことではないが、それでも学生の頃の卒業生Fさんは、服が大好き！という印象が強かったため気になっていた。

平日の仕事の後にお話を伺う約束をとりつけ、私は横浜まで向かった。卒業生Fさんの行きつけの喫茶店で、現在の仕事の内容や就職先を選んだ経緯、休日のこと、学生時代の話などを1時間半ほどの間でゆっくり伺った。話を伺う中で、学生時代、精力的に制作をされていた先輩も自分と同じ様に悩んだことがあったという話に驚き、仕事についての喜び、苦勞されている話など就職活動や進学で悩んでいる友人や後輩にも教えたいと思うことがたくさん出てきた。

卒業生Fさんは大学院で3ヶ月の留学やファッションを学んだ経験のなかで、人の装いや洋服、身につけるものが好きということに改めて気づいたようだ。身につけることができ、人に喜んでほしいという思いは学生の頃から志していたことだそうだ。仕事として学生時代とは違い、時間や予算に制約がある中で、学んできた素材や形態が変わっても、仕事でジュエリーを制作する姿勢は学生の頃の先輩の姿と大きく変わらないように思えた。このことは今、大学生活の中で自分が何を軸としていくのかを考えている学生にとっても励みになると思う。またそこから、私自身今何をすべきか、あらためて深く考えることができた。先輩とじっくり話をした時間は、卒業生Fさんが学生だったときとは違うかがやきがあった。これからは自分が行き詰まった時にまた話を伺いにいきたいと思った。

漆・木工コース 学部3年生 学生G

卒業生H：酒造会社 社員

(平成26年度 漆・木工コース卒業)

今回、私は酒造会社に就職なさった卒業生Hさんにインタビューをさせていただきました。工芸、漆木工コースを卒業なさって、業種は違えども同じものづくりの世界に関わっていらっしゃるということで、お話をうかがいたく思いました。

在学中、就職するまでのこと、そして、働きながら制作も続けることについてなど、詳細にお話をうかがうことができ、今後の自分の進路を考えるきっかけにもなりました。

そして、実際にインタビューをさせていただき、卒業後、制作を続けることについて、具体的にイメージできるようになりました。また、美大を出たあとの進路の選択肢は、自分の考えていた以上にあるのだということがわかりました。学内にいるだけではなかなか聞くことのできない、大学をすでに卒業された方のお話を聞くことで、在学中に自分がどんなことをしておくべきなのか、何を意識して勉強すればいいのかについても知ることができ、今後の大学生活の時間をどう過ごすべきか考えることができました。大学という環境にいるうちから、広い視野もち、自分の専門はもちろん、それ以外のことにも興味をもって勉強することが必要だと感じました。その上で、思った以上に、自身の専門性は常に求められているのだということも気づくことができました。自分は、卒業後どんな進路を選んだとしても、作ることは続けていきたいと思っています。そのときに、大学とは異なる環境で制作をする上で、何が障害になるのかを教えていただいたのも、卒業し働かされている方にお話をうかがったからこそ知ることのできたことだと感じております。

自分は、インタビューをさせていただくまで、卒業後は就職を考えていました。しかし、今回のインタビューをさせていただき、自分の扱っている分野についてもっと深く学んだ上で、その知識や技術、経験を活かしたいとも考えるようになりました。また、工芸以外の世界にも、多く触れる機会を持ちた

いとも思っています。幅広い視野と高い専門性を兼ね備えられるよう、大学での勉強、制作に励みたいのです。まずは来年の卒業制作にむけて、自分の技術を客観的にとらえて、自身の考えと向き合い、制作をしていきたいと思っています。

学部生2名修士の学生2名がインタビューに行き、それぞれの心境の変化や考えをまとめてレポートとした。学生はまず、卒業生にどのような職業に就いた人がいて、どの人にインタビューに行きたいかを決める。そして基本的な質問事項以外は自身が質問内容を決めることができる。このインタビューをきっかけに、進路の考えを変更した学生も、定まった進路でも検討すべき課題や以後の意識の変化につながったケースもある。この取り組みでは職業観の育成と社会との接点によるコミュニケーション能力の育成という点でも有効な取り組みであったと考える。また、このインタビューが次節で述べる卒業生の活躍を紹介するサイトで公開されていることで、他の学生においても学生目線の質問事項と卒業生の返答を読むことで自身の職業観の育成につながると考えられる。

「卒業生の活躍を紹介するサイト開設」

平成27年に行った取り組みを広く工芸科の学生あるいは工芸科入学を希望する受験生に向けて公開することを目的として、卒業生の活躍紹介サイトの開設を行った(図2)。

工芸科運営ページを作成し、また大学のサイトとの関連付けを行いアクセスしやすくした(図3)。卒業生の活躍を紹介するサイト内の内容としては、

- ①活躍する卒業生の紹介と学生へのメッセージ掲載ページ

作家として活躍する先輩4名、企業人として活躍する先輩3名、教員・研究職として活躍する先輩4名

- ②「トーク&ディスカッション」の概要と講師の紹介とメッセージの掲載ページ



図2 工芸科の卒業生活躍紹介サイト
<http://kanabicroft.wixsite.com/grad>



図3 工芸科運営ページ
<http://www.kanazawa-bidai.ac.jp/craft/crafts.html>

- ③学生による卒業生インタビュー全文掲載ページ
- ④工芸科イベントや卒業生の展覧会等案内掲載ページで構成している。

以上の構成で作成した。開設後に、大学のホームページと関連づけし、金沢美術工芸大学工芸科のFacebook等で紹介することで少しずつアクセス数は増えている。今後も卒業生の活躍紹介ページに掲載する、卒業生を増やしていく計画である。

7. 最後に

上記の内容で研究を進めてきたが、「職業観の育成」と「社会との接点によるコミュニケーション能力の育成」という点では有効な内容であったと考えられる。

工芸科のキャリア発達に関連する教育内容は平成27年度から取り組みを加えて以下の内容をカリキュラム内で行っていることになる。

- ・ 伝統文化論（茶道、華道、能楽等の芸道や食文化など金沢における伝統文化を学ぶ）
- ・ ポートフォリオ作成
- ・ 若手工芸家の講義（年間4回程度）
- ・ モノづくりと社会の現状についての講義（金谷勉先生（セメントプロデュース代表）
- ・ インターンシップ（地域工芸演習Ⅰ）
- ・ 地域伝統産業企業との連携授業
- ・ 現代工芸論（工芸科教員による作家活動についての講義）
- ・ 学部3年生を対象とした現代工芸論において修士1年生による制作研究紹介
- ・ プロフィールシートの作成、発表
- ・ 複合素材演習（専修するコースの素材と他の素材を組み合わせる研究を行う）
- ・ 卒業生によるトーク&ディスカッションの開催
- ・ トーク&ディスカッションを受けてのアンケート
- ・ 学生による卒業生へのインタビュー
- ・ インタビューアーによるレポート
- ・ 卒業生の活躍を紹介するサイトの開設

今後はキャリア教育の体系化という観点において、上記のキャリア発達に関連する内容をキャリア教育カリキュラムという一連の流れとして組み込み、学生がキャリア発達を理解し、意識的に段階を踏みながらそれぞれの内容に取り組むことが重要であり、そのためのキャリアビジョンアプローチへの導入となるオリエンテーションや専門領域毎に自身が提案するものを社会に提示するあるいは金沢という地域性を生かし協同事業として展開し、発表する

といった実践が必要である。このような実践が社会との接点によるコミュニケーション能力の育成につながると考える。現行のカリキュラムにおいても地域工芸演習においてインターンシップを行っている。しかし、さらに、他大学における地域の伝統産業等との協同事業の実施状況、効果についての調査等を行い、プログラムとして専門教育の中で導入できる可能性を検討していく必要がある。持続可能なキャリア教育環境の構築を目指し、研究を継続していく。

付記

本論文は平成27年度特別研究の成果(の一部)である。

註

- 1 『中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』 株式会社ぎょうせい、2011年、16項
- 2 『中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』 株式会社ぎょうせい、2011年、16項
- 3 『中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』 株式会社ぎょうせい、2011年、16項
- 4 『中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』 株式会社ぎょうせい、2011年、68項-70項
- 5 『中央教育審議会答申 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』 株式会社ぎょうせい、2011年、198項
- 6 寺田盛紀、文部科学省/中高教育審議会/キャリア教育・職業教育特別部会（第4回）配布資料/資料8 寺田委員プレゼンテーション資料/キャリア教育・職業教育のあり方について http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/attach/1266425.htm
アクセス日：2016年11月1日
- 7 京都市立芸術大学 キャリアデザインセンター
「五芸術大学キャリア支援担当者情報・意見交換会」[芸術大学におけるキャリア支援を学ぶ会] 報告書、第二部「芸術大学におけるキャリア支援を学ぶ会」議事録」2015年、9項

8 同上 5項

9 京都市立芸術大学 キャリアデザインセンター

「五芸術大学キャリア支援担当者情報・意見交換会」「芸術大学におけるキャリア支援を学ぶ会」報告書、「五芸術大学キャリア支援担当者情報・意見交換会」議事録（資料①-④含む）、2015年、1項-10項

(みやなが・はるか 工芸科／陶磁)
(いけだ・しょういち 工芸科／陶磁)
(はやし・やすし 工芸科／金工)
(おおたか・とおる 工芸科／染織)
(やぶうち・くみ 工芸科／金工)
(あおき・ちえ 工芸科／漆・木工)
(なかむら・ゆき 元工芸科／漆・木工)
(2016年10月31日 受理)